

佐久大学からこんにちは

—地域と紡ぐヒューマンケア—

分科会詳細

佐久大学は、地域に根差し、地域発展に寄与することを目的に、「地域ケア」学ぶ保健・医療・福祉の総合大学として30年以上に渡り、多くの人材輩出を行ってきました。2020年からは新たに人間福祉学部も開設し、より多様な分野におけるヒューマンケアを実践できる人材育成をスタートしています。

複雑・多様化する地域課題に対応する高度な人材育成を行っていくためには、学びの基盤となる地域とのつながりが重要になります。信州の地で、地域と共に大学はどのようにヒューマンケアを担う人材を養成していくことが出来るのか、また求められるのかについて考え、研究・教育・実践の拠点である大学としてのこれからの地域とのつながり方について展望します。



上西 一貴

所属

佐久大学 人間福祉学部

略歴

2016年、東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科社会福祉学専攻博士前期課程修了。修士（ソーシャルワーク）。2021年、佐久大学人間福祉学部助教。

書籍等

「地域での対人援助における援助空白の意義—地域福祉コーディネーター—活動記録の計量分析—」『社会福祉学評論』21、2020年など



黒澤 大輔

所属

小海町産業建設課商工観光係

略歴

小海町生まれ、小海町育ち。

立命館大学法学部卒業後、県内地方銀行勤務を経て、2006年4月小海町役場入庁。

現在、商工観光振興を担当しつつ、地域づくりに取り組んでいる。



李 省翰

所属

佐久大学 人間福祉学部

略歴

韓国（釜山）生まれ、2009年に来日。

日本福祉大学大学院修了、博士（社会福祉学）。日本福祉大学、同朋大学などの非常勤講師を経て、現職。

現在、高浜市南部まちづくり協議会の協力委員、小海町の地域づくりに携わっている。



佐々木 愛歌

所属

佐久市市民活動サポートセンター
NPO法人長野県NPOセンター

略歴

書籍等



コメンテーター 野口 定久

所属 佐久大学 人間福祉学部



司会 長谷川 武史

所属 佐久大学 人間福祉学部

「大学」から見た「地域」

佐久大学CBL実習での「大学」と「地域」の関係

上西一貴 佐久大学 人間福祉学部
k-jonishi@saku.ac.jp

佐久大学CBL実習の概要

□CBL*実習の目的

- 地域の生活文化に関心を寄せながら、地域のくらしに触れ、住民と継続的な交流をすることで多様な価値観を理解する。

□科目としてのCBL実習

- CBL実習Ⅰ（1年次、必修）
 - ↳市内複数の公民館で、学習グループに参加する。
- CBL実習Ⅱ（1年次、選択）
 - ↳近隣市町村で2泊3日、フィールドワークを行う。

CBL実習のスケジュール

□CBL実習 I

- 4-5 月 …事前学習、共通プログラム
- 6-7 月 …学習グループ参加
- 7 月 …報告会

□CBL実習 II

- 7-8 月 …事前学習
- 9 月 …実習(2泊3日、最終日は現地報告会)
- 10 月 …実習まとめ
- 12 月 …報告会

3

CBL実習 I の目標

□到達目標

1. 地域(地区)の特性、概要がわかる。
2. 住民との関わりを通じて、地域の生活文化に関心が持てる。
3. 地域(地区)の風土、特有の価値観が理解できる。
4. わが国の公民館の歴史と役割、社会的意義について理解できる。
5. 地域が抱える社会課題について考えられる。
6. 自分自身が地域の生活者であることを自覚できる。

4

CBL実習 I の様子

□共通プログラム

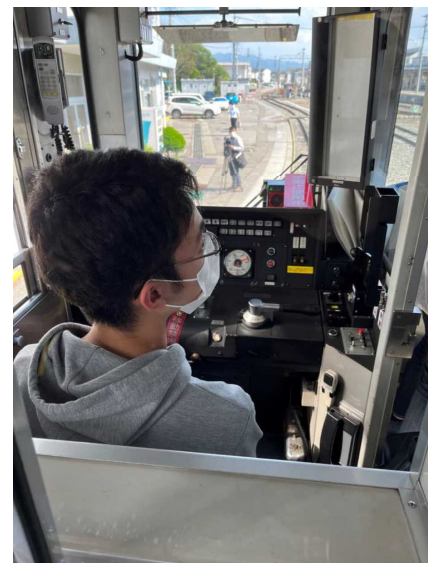
■ 中央公民館長講話

↳ 佐久市中央公民館長ほか、各地区公民館の館長による公民館についての講義。

■ 小海線の魅力と歴史講座

↳ 中込公民館、JR東日本長野支社の協力で、地域資源としての鉄道路線やJRによるまちづくり活動についての講義。

↳ 社内研修用運転シミュレーター体験や、観光列車の貸し切り見学。



(写真:観光列車ハイレール1375の運転席に座る学生)

5

CBL実習 I の様子

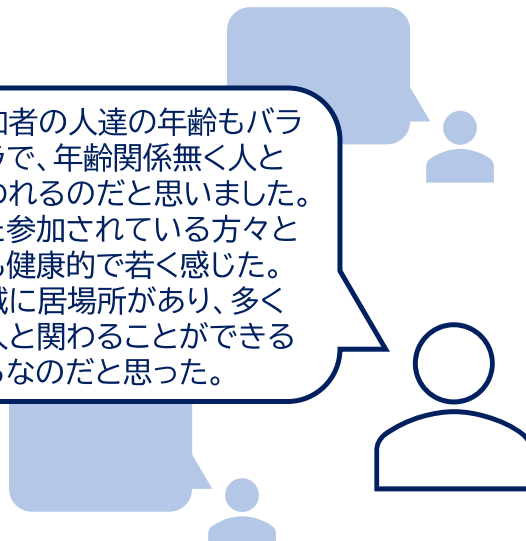
□各公民館で学習グループに参加



(左:野沢公民館生涯学習手芸、右:中込公民館芽吹き俳句会)

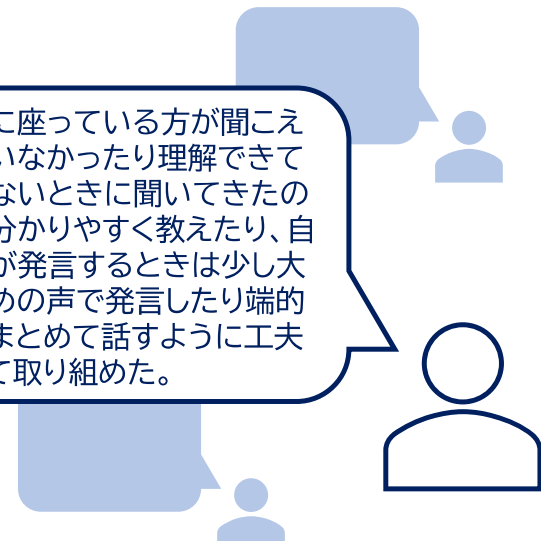
6

CBL実習Ⅰの学生の声



参加者の人達の年齢もバラバラで、年齢関係無く人と関われるのだと思いました。また参加されている方々とても健康的で若く感じた。地域に居場所があり、多くの人と関わることができるからなのだと思います。

公民館活動についての振り返り



隣に座っている方が聞こえていなかったり理解できていないときに聞いてきたので分かりやすく教えたり、自分が発言するときは少し大きめの声で発言したり端的にまとめて話すように工夫して取り組めた。

自分自身の実習についての振り返り

7

CBL実習Ⅱの目標

□到達目標

1. 対象地域について、地域(地区)の特性、概要がわかる。
2. 地域での暮らし方や多様な生活文化を理解し、尊重することができる。
3. 地域の社会的つながりや社会課題について、自らの関心を深めることができる。
4. 実習を通して自己課題を設定し、それに対する自己省察・自己評価ができる。

8

CBL実習Ⅱの様子

〇川上村での実習



(左:いちご農家にインタビュー、右:川上村ケーブルテレビの見学)

CBL実習Ⅱの様子

〇小諸市での実習



(左:小諸市八朔相撲のフィールドワーク、右:現地報告会)

CBL実習Ⅱの様子

□小海町での実習



(左:農家さんとお話、右:護摩行体験)

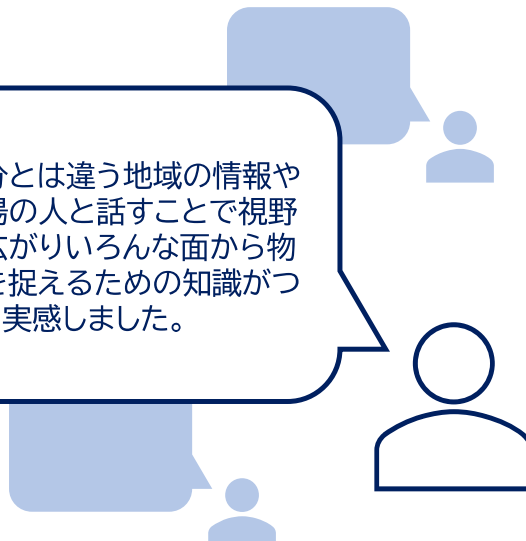
CBL実習Ⅱの様子

□青木村での実習



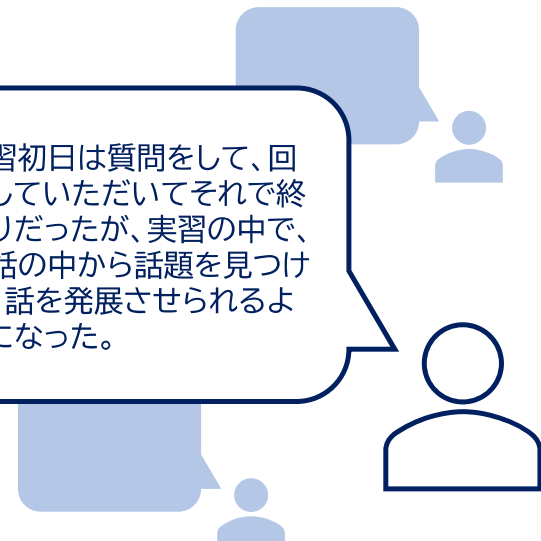
(左:義民太鼓、右:住民の方にインタビュー)

CBL実習Ⅱの学生の声



自分とは違う地域の情報や立場の人と話すことで視野が広がりいろんな面から物事を捉えるための知識がたくと実感しました。

住民との交流についての振り返り



実習初日は質問をして、回答していただいてそれで終わりだったが、実習の中で、会話の中から話題を見つけて、話を発展させられるようになった。

自分自身の実習についての振り返り

13

「大学」から見た「地域」の魅力

□福祉より先に、まず地域(生活)という視点の獲得

- 「対象者」ではなく生活者であるという視点
- 生活習慣、文化、大切にしていることは多様
- 自分も地域に住む生活者のひとり
- ➔ その後の福祉の実習にもいきってくる

□学生の「ちょっとした」成長

- 知らない人(異文化)とかかわる
- グループで協働する
- ➔ その後の学生生活にもいきってくる(進路も?)

14

「大学」から見た「地域」の難しさ

□部外者として受け入れてもらう

- 誰に話を通すべきか
- どのようなルートで話を通すべきか
- ➔ 役所の協力が必要

□地域は大学のためにあるわけではない

- 区長さんの交代
- 忙しい日々の仕事
- ➔ 丁寧な説明が必要

15

「大学」と「地域」の関係

□開始当初の関係 …(A)

- 地域の方に協力を仰ぐ、教えを乞う

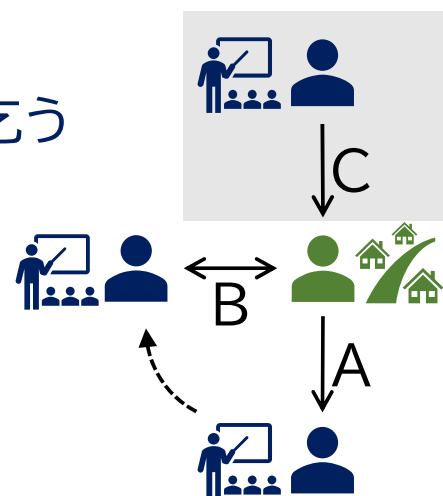
□望ましい関係 …(B)

- お互いに利益がある

□望ましくない関係 …(C)

- 一時的で消費的な利用
↳ 関係Aと関係Cは表裏一体。

➔ 「大学」と「地域」の間に、**継続的で実感を伴う互恵的な関係(B)**を構築していくことが今後の課題



16

「地域」からみた「大学」

佐久大学と小海町の現在と未来

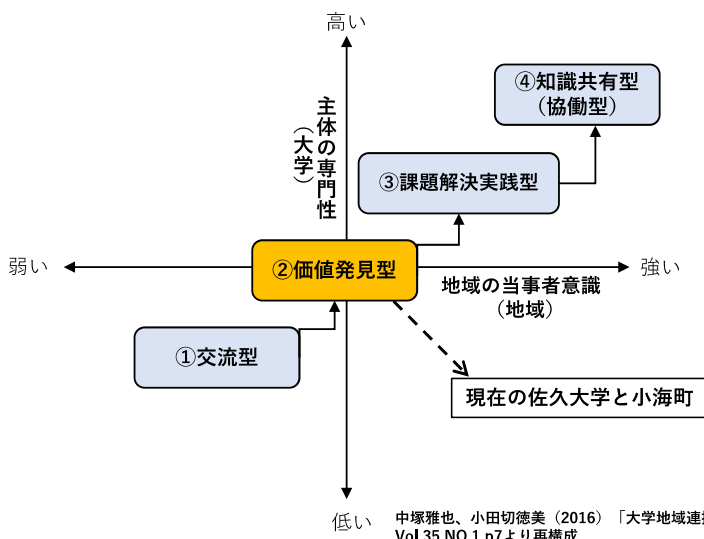
1. 佐久大学のCBL教育と小海町
2. 地域にとって佐久大学の価値（位置）
3. これから佐久大学と小海町

黒澤 大輔 小海町産業建設課商工観光係
kurosawa-daisuke@koumi-town.jp
李 省翰 佐久大学人間福祉学部
s-lee@saku.ac.jp

自治体消滅論と地域づくりー地域と大学

少子高齢化による自治体消滅論（課題と提案）

- 2014年、日本創生会議の報告書（増田レポート）によって提起された自治体消滅論。
- 現在、過疎地域、あるいは限界集落において適切な地域づくり戦略が求められている。
- その一つの軸として地域と大学の連携を考えるとともに、持続可能性を担保すること。
- 大学の「**主体の専門性**」と地域の「**当事者意識**」を中心とした地域づくり戦略はどうか。



連携と地域づくりへの道のり 「ステップアップ方式の地域づくり」

- ① 共同の関心
- ② 地域資源と価値共有
- ③ 連携による地域課題解決
- ④ 学術・政策提言及び立案

ー協力と評価による持続可能性の確保

小海町の概要

～人口減少、高齢化に悩む過疎の町～

小海町はハケ岳、松原湖などの湖沼を観光地として持つ風光明媚な町です。

高齢化が進み、65歳以上の割合（高齢化率）はすでに42%を超え、20年後の2045年には55%ほどになると見込まれています。

人口は毎年約100人ほど減少し、2022年11月時点で4,397人となっています。

結果、商店街など暮らしを支える機能も縮小しつつあり、大きな課題となっています。

～佐久大学との連携協定～

小海町と佐久大学は●●●●年●月に連携協定を締結し、●●を進めていくこととなりました。



町のシンボルである松原湖



JR小海線小海駅を中心に商店街が続くが、廃業している店舗も多く、活性化が課題となっている。

3

①小海町が佐久大学CBLを受け入れる理由

小海町は、地域の福祉を担う人材となる佐久大学の学生が、まず地域の現状を認識し（**気づき・違和感**）、それに対する自分なりの意見を持ち、行動すること（**行動変容**）が、重要なことであると考えています。
そして、その過程に関わることが地域の責任であると考えています。

地域で何が起きているのか。



その結果、人々の暮らしはどうなっているのか。



地域はなぜこうなったのか、これからどうなるのか。



私は、それに対してどう思うか。どうするのか。

4

②-1 地域にとって佐久大学の価値(位置)とは

令和3、4年度のCBL受け入れを経て、見えてきたもの

佐久大学CBL受け入れ
(学生との交流)



(実例1) 学生の宿泊先、体験先となった寺の住職が、学生と寺の地域での役割について意見を交わしたことがきっかけの一つとなり、耕作放棄地を借り、檀家や地域の若者と米作りを始めた。

(実例2) 学生のヒアリングを受けた商店が、自らの商品の魅力や地域の魅力を思うように伝えられなかったという苦い経験を経て、町のパンフレットなどにより情報収集を始めた。

(些細なことではあるが、) 行動変容が起き始めている！

5

②-2 地域にとって佐久大学の価値(位置)とは

(地域の現状)

もうどうにもならない、できないという諦め、無関心。
自分の課題として完結してしまおうという気持ち、雰囲気。
未来を考えることへの恐怖心。



佐久大学学生との交流

(影響)

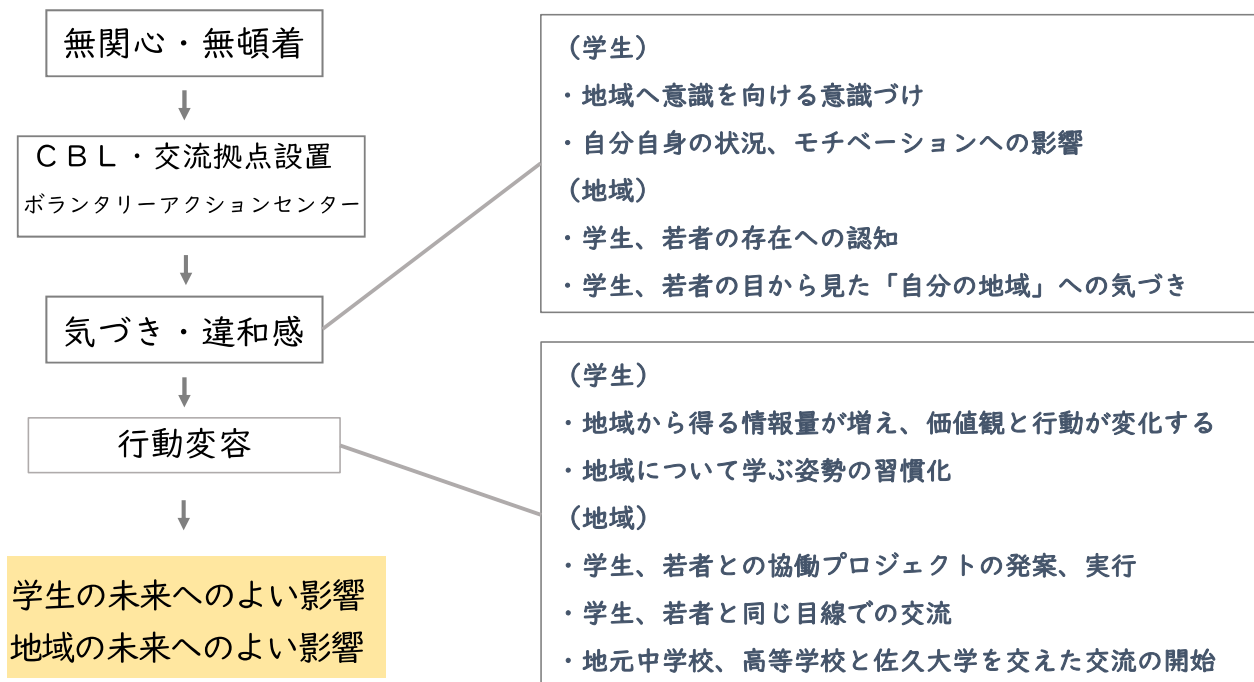
自分に興味・関心を持つ学生との出会いによる喜び
自らの持つ「価値」の認識・発見
学生の意見からの影響と行動変容、新たな取組の始まり

未来を生きる学生の存在を認識することにより、例えば現状の社会を少しでもよくして次の世代へ渡したいという気持ちへの転換が生まれる。
学生と地域の人々との交流の過程で発生する影響が、地域にいい影響を与える。

6

③これからの佐久大学と小海町

学生が「気づき」や「違和感」を地域で常に得られる環境づくりを進め、その過程で地域の人々の気持ち、行動も変化（「行動変容」）させていきたいと考えています。



7

私たちの願い

小海町の人々、特に高齢者は、町の現状にあきらめに近い感情を持っているように感じます。

佐久大学学生とのCBLによる交流、また交流拠点の設置や仕組み化、ボランタリーアクションセンターは、学生が地域の現状を知り、未来の自分のありたい姿を見出すきっかけとなります。

そして、その学生と地域の人々が意見を交わし、協働で行動することができれば、地域の未来に対するよい影響が生まれ、それにより次の世代へ渡す地域をよりよくすることができると考えています。

8



ご清聴ありがとうございました。